

新刊紹介

岩田正美著

『貧困の戦後史—貧困の「かたち」はどう変わったのか』

四六判 / 352 頁 / 定価 1,800 円+税 / 筑摩書房, 2017 年

木下 武徳

立教大学コミュニティ福祉学部教授

1. はじめに

本書は戦後日本の貧困の「かたち」の変遷をみていくことによって、これまでの貧困のとらえ方を再考することを目的として書かれたものである (p. 12)。貧困の「かたち」とは、戦後の各時代区分のなかで、それぞれの時代を象徴する貧困、例えば、「引揚者」、「浮浪児」、「ニコヨン」、「ボーダーライン層」、「ホームレス」等を示している。これらは「その貧しさの特定の『かたち』によって注目され、また、人びとの抵抗・反抗、あるいは社会の側からの差別的なまなざしによって確認されてきた」貧困である (p. 244)。

貧困といえば所得の多寡で描かれることが多いが、本書でそうしなかった理由として次の2つを挙げている。第一に、所得の多寡では把握できない、「食べるものすらない」という「きわめて原初的な『かたち』」があること。第二に、所得や貧困の統計方法が変更されたり、調査がされなかったりすることで、量的計測が一貫したものではないことを指摘している (pp. 313-314)。一方、「社会と、社会がその中に位置づける貧困との関係を意味している」のが貧困の「かたち」であり、その中に、「ある個人の人生を通してなら把握できるかもしれない貧困一般」が隠されているという (p. 314)。

こうして本書では、戦後の各時代区分における

貧困の「かたち」について、社会的背景、社会調査等の統計的把握というマクロから、貧困者自身の生活や仕事、それをどのように経験しているのか当事者の「声」のミクロまで、貧困の全体像が提示される。

2. 本書の構成

本書は時代区分に応じて5章で構成され、「おわりに」で総括がなされ、貧困に対する著者の主張がまとめられている。以下、概略である。

第1章「敗戦と貧困」では、敗戦直後の人々の飢餓状態、「ヤミ市」や経済統制、貧困救済施策の社会状況を踏まえ、「壕舎生活者」(防空壕等に住む人)、「引揚者」、「浮浪児」「浮浪者」という貧困の「最底辺」にある人々の極貧状態や政府の対策等が紹介される。

第2章「復興と貧困」では、失業対策事業の登録日雇「ニコヨン」の奮闘や家計のやりくり、また、「仮小屋」が集積した地域、特に「蟻の街」や「バタヤ部落」、「原爆スラム」等の生活や仕事、自助組織等が紹介される。

第3章「経済成長と貧困」では、戦後の高度経済成長期の大企業と中小企業・農業部門の不均衡発展である「経済の二重構造」や社会階層論等の社会背景を概説したうえで、エネルギー政策転換による旧産炭地域での失業増加と対策、そうした

失業者を日雇い労働者として引き受けてきた「寄せ場」での仕事、生活等について紹介される。

第4章『「一億総中流社会」と貧困』では、消費者信用が発展し、サラ金やクレジット利用が広まり、多重債務問題を引き起こし、また、「寄せ場」の「法外援護」や生活保護の失敗、行政による引揚げ者等のための農村開拓事業の失敗、公営住宅団地の集積した貧困状態等が説明される。

第5章『「失われた二〇年」と貧困』では、バブル経済の崩壊以降の「格差社会」に象徴的な路上生活者、派遣労働者、ネットカフェ難民、派遣村に見られる生活や仕事、また、このころから公表されるようになった相対的貧困率（より正確さを求める著者の表現では「相対所得貧困率」）、児童虐待や妊産婦等の「かたち」にならない貧困が紹介される。

おわりに「戦後日本の貧困を考える」では、例えば、浮浪児が後に炭鉱で働き、閉山で寄せ場に行き、バブル崩壊でホームレスになるというように、一人の人生のなかで貧困の「かたち」が交錯していくことや、また、ポーガムの貧困理論に当てはめてこの貧困史の総括をし、貧困の「かたち」に影響を与えた諸要因の分析を行っている。

3. 本書から学ぶこと

本書は、戦後の各時代を象徴する貧困問題を取りあげて、それらが出現する社会背景や対策が論じられ、貧困問題の全体構造が理解できることに加えて、貧困にある人々の声とその貧困の体験的理解や暮らしの切羽詰まった臨場感・なまなましさを伝えてくれる点でとても読み応えのあるものになっている。紙幅の都合もあり、評者が本書、特に「おわりに」の著者の主張のなかで印象に残った3点を指摘しておきたい。

第一に、「貧困の『かたち』は政策の「かたち」

でもある」という（p. 321）。つまり、戦災孤児、開拓農民、炭鉱労働者、ホームレスの人々、多重債務者など政策転換によってその貧困の「かたち」も大きな影響を受けてきた。例えば、広島市の平和記念公園建設のために立退きにあつて原爆スラムに追いやられていた人々もいた（p. 121）。貧困にある人々に与えた政策の影響を見抜く力が貧困の理解には不可欠であると痛感させられた。

第二に、貧困をもたらす最大の要因は「戦争」であるという指摘である（p. 320）。戦争もあきらかに政策であり、それにより多くの人々に貧困がもたらされた。同時に、著者は地震や原発事故等の災害対策も戦争に類するものであると指摘していることは興味深い。

第三に、「貧困者はもう十分『自立的』であり、それが問題なのだ」という（p. 322）。問題の本質は、貧困を個人が引き受け、その人々をブラック企業を含む市場が取り込み、結果としてその意欲や希望も奪われることであり、問われるべきは、「自立的」であろうとしすぎることで、また、それを促す社会であるという（pp. 323-324）。本書からは貧困にある人々の生きるための必死の奮闘が伝わってくる。しかし、その闘いに敗北せざるをえない社会背景や市場の問題がある。それに対応するため、著者は「強い」社会政策、具体的には、住宅手当や子どもの養育費用、子育て支援サービスの充実等を指摘する（p. 326）。

『貧困の戦後史』をみるということは、個人的に現れる貧困を社会的にみることであり、そのことによって、貧困問題の本質的な理解ができるのであり、それを前提にした貧困対策が求められるということも教えてくれる。そういう意味で、実は本書は自助努力一辺倒の生活困窮者自立支援事業、繰り返される生活保護基準の切り下げ等、現在の表層的な貧困対策への大きな警鐘でもある。